

Japan Society of  
Youth and Adolescent Psychology

# Newsletter

第 75 号 2018 年 7 月 13 日  
発行：日本青年心理学会事務局

## ■目次

### <第 26 回大会委員長挨拶>

溝上慎一：日本青年心理学会第 26 回大会のご挨拶・・・・・・・・・・・・・1

### <特集：研究委員会企画>

高坂康雅：まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

高坂康雅：「研究委員会から日本青年心理学会に関するアンケート」結果の概要・2

若松養亮：大きくない学会なりのコストパフォーマンスと、実現可能性と・・・・6

丹羽智美：学会だからこそ提供できる機会を・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

原田 新：学会存続に向けた変化への期待・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

池田幸恭：あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

### <書評：私のおすすめ、この 1 冊>

石黒香苗：『トランジションー人生の転機を活かすために』ウィリアム・ブリッジズ  
(著) パンローリング (2014 年刊)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

小平英志：『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ』永田カビ (著) イースト・プ  
レス (2016 年刊)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

### <広報>

日本青年心理学会 2018 年度国際ワークショップのご案内・・・・・・・・・・・・・9

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・10

事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

### <第 26 回大会委員長挨拶>

#### 日本青年心理学会第 26 回大会のご挨拶

大会委員長 溝上慎一 (京都大学)

日本青年心理学会の大会を京都大学で開催いたします。日程は 2018 年 10 月 27 日 (土) ~28 日 (日) の 2 日間、場所は吉田南キャンパスとなります。大会情報は、ウェブサイトですべて随時更新して発信していますので、ご覧ください。

<http://smizok.net/adokyoto2018/index.html>

良くも悪くも、京都の秋の行楽シーズン、ど真ん中の日程です。近年外国人観光客が多く来京する関係で、京都でのホテル予約が難しくなっています。はやめに予定を立てて予約するようにしてください。簡単なものですが、ホテル情報もウェブサイトで案内します。あわせてご覧ください。

主な大会プログラムとして、(1)エリクソン研究やエリクソンの「ジェネレイショナルサイクル」のご研究で知られる西平直先生 (京都大学教授) の講演、ならびに大野久先生 (立教大学教授/本学会理事長) との対談、(2)国際交流委員会との共催で、欧州やフィンランドのキャリア発達や成人期への移行問題を専門とするフィンランドの若者社会学者ヘレナ・ヘルブ先生の招聘講演が予定されています。その他、研究委員会、国際交流委員会の企画シンポジウム等が計画されています。個人研究発表もふるってご応募ください。

京都での大会が、青年心理学研究の発展に繋がり、また会員同士の交流が深まる機会となるように、スタッフ一同準備をしまいたします。多くの会員の発表申込、ご参加を心よりお待ちしております。

### ＜特集＞ 研究委員会企画

今年度より年3回のニューズレターにおける特集の編集方針が変わりました。基本的には、①研究委員会／国際交流委員会とのコラボレーション企画、②大会特集、③広報・ニューズレター編集委員会のオリジナル企画、という方向です。また、読者の皆様から「特集で取り上げてほしいテーマ」や「書評で取り上げてほしい本」を募集しています。さらに、「次号の特集テーマに対する意見投稿」や「会員からの情報や意見の自由投稿」も募集しています。皆様の積極的な参加をお待ちしております。詳細は、このニューズレターの10ページ「広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ」をご参照ください。

今回は、研究委員会企画として、以前行われた本学会に関するアンケートに関して特集を組んでいただきました。ニューズレター上で、学会運営に関して様々な意見が出され、会員の議論や交流が促進されることを期待しております。

(担当：家島明彦・本田周二)

### まえがき

前・研究委員会委員長 高坂康雅（和光大学）

日本青年心理学会研究委員会では、日本青年心理学会員を対象に、日本青年心理学会の大会・学会誌(青年心理学研究)、学会の活動などについてのアンケートを行いました。このアンケートの目的は、「日本青年心理学会員が日本青年心理学会に対してどのような要望・期待をもっているのかを明らかにし、今後の日本青年心理学会のあり方について議論をしていく基礎的な情報を得ること」でした。回答にご協力いただいた会員のみなさまには、改めて御礼申し上げます。ここでは、アンケートの結果の概要についてご報告いたします。また、これらアンケートの結果をもとに、3名の先生方に、ご意見をいただきました。

なお、このアンケートへの回答やいただいたご意見、これらに対する議論に対して、学会としてお応えできるとは限らないこともあることをご了承ください。

### 「研究委員会から日本青年心理学会に関するアンケート」結果の概要

高坂康雅（和光大学）

#### 1. 調査実施方法・期間

2016年12月末から2017年3月末まで、web調査ツール「google フォーム」を用いてweb調査を実施しました。実施に際して、調査内容について、常任理事会で検討・確認を行っていただいたうえ、日本青年心理学会事務局から会員宛のメールおよび学会ホームページにて、周知をし、回答依頼をしていただきました。

#### 2. 調査協力者(回答者)

調査にご協力いただいた方(以下、回答者)は、83名(男性49名、女性34名)でした。会員数がおおよそ400名ですので、約20%の方にご協力いただきました。年代としては、20代が10名(12.0%)、30代が22名(26.5%)、40代が27名(32.5%)、50代が12名(14.5%)、60代以上が12名(14.5%)でした。また、会員区分では、学生会員が12名(14.5%)、正会員が69名(83.1%)、名誉会員が2名(2.4%)でした。回答者のうち、45名(54.2%)は年次大

会での発表経験があり、49名(59.0%)は青年心理学研究への投稿経験がありました。

### 3. 結果

#### (1)年次大会について

年次大会については、①「非会員が単独または筆頭で研究発表をすること」、②「研究発表の形態として、ポスター発表を導入すること」、③「大会参加・研究発表を促進するための費用補助・参加費の割引」、④「大会発表賞の設立」の4点について、「強く賛成」から「強く反対」の4つの選択肢に「わからない」を加えた5つの選択肢から選び、その理由についても回答を求めました。それぞれの回答の分布を Figure 1 に示します。

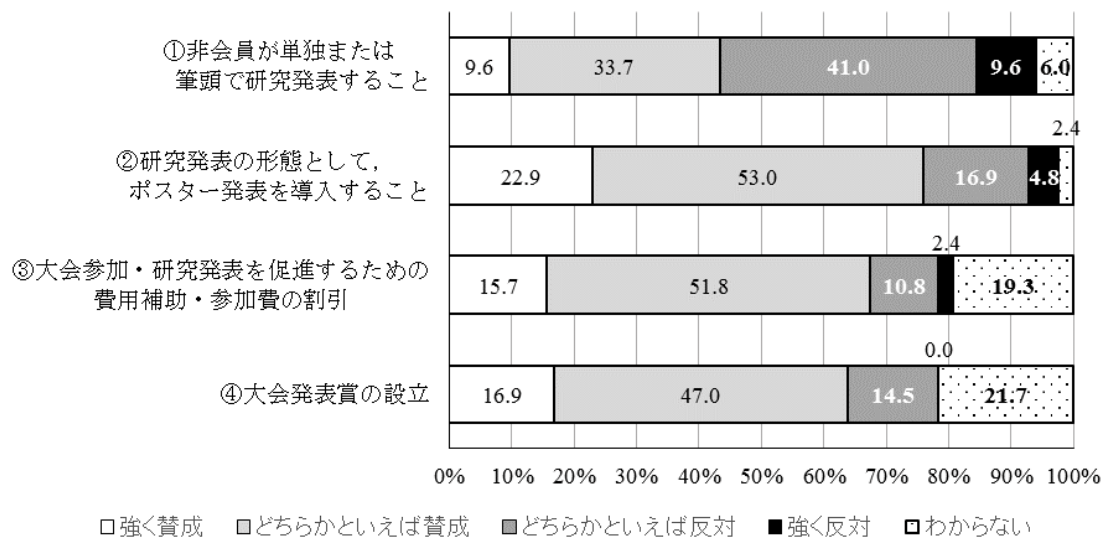


Figure 1 年次大会に関する質問の回答分布

①「非会員が単独または筆頭で研究発表をすること」については賛否が分かれました。「経済的な理由などの理由で学会に入会できない人もいると考えられ、そのような方にも発表の機会を提供することで、青年心理学の発展に寄与する可能性があるから」「非会員でも発表してくれることにより議論が発展すると思いますし、発表体験により学会に入ってもらえるかもしれません」という意見があった一方、「正会員として年会費を支払う意味がなくなるため。発表・投稿は正会員の権利だと思います」「非会員の発表にあたって学会員の会則、研究倫理等の責任を持たせられないし、問題が生じた場合の学会側の責任も問われる」という意見がみられました。

②「研究発表の形態として、ポスター発表を導入すること」については75%以上が「賛成」としていました。「口頭のみは発表の際に敷居が高いと思うし、ポスターは気軽に交流できる」「多様な選択肢は発表者のニーズを考慮することになり、結果として発表者の増加につながるのではないかと考えられます。とくに、口頭発表をすることに戸惑いを感じている若い院生の方たちにとって、ありがたいのではないのでしょうか」という意見がみられました。一方で、「口頭発表しフロアの参加者と議論できることが本学会の魅力だから」「他の学会と変わらなくなる。また口頭発表に耐える質と準備を怠ってほしくないから」という意見もありました。

③「大会参加・研究発表を促進するための費用補助・参加費の割引」については、65%以上の方が「賛成」を示しましたが、約20%が「わからない」と回答していました。「財政面の懸念はありますが、大学院生の方、しばらく参加していなかった先生方の費用補助・参加費の割引は有効であると考えます。補助・割引をおこなうこと自体が、学会によるひとつのメッセージとなるといえます」という意見がみられた一方、「参加の意思決定において、そこはあまり重要な点ではないように思われます。他の多くの心理学関連の学会と同じく、正会員、学生会員、非会員といった枠組みで十分な気がします」という意見もありました。なお、第24回大会(滋賀大学)、第25回大会(岐阜聖徳大学)では、「ホームカミング割」という割引制度が導入されました。

④「大会発表賞の設立」についても 65%以上の方が「賛成」を示した一方、約 20% が「わからない」と回答していました。現在、年次大会では、青年心理学研究に投稿するに値すると思われる発表に投稿を勧める「座長推薦制」が導入されています。「賛成」とした方からは、「(座長推薦制は)受賞歴として業績に書けないから。現状では誰が推薦されたのかもわからないし、論文審査で有利になるわけでもない」「表彰経験があるということが研究者としての自信に繋がるし、青年心理学会への帰属意識も高めると予想されるため」という意見が出されました。一方で、「大会発表賞を設立するほど発表数が多いと思うので」「表彰の一時的なメリットはあっても会の発展の効果は期待できない」という意見もみられました。

## (2)機関誌「青年心理学研究」について

機関誌「青年心理学研究」については、①「短報の導入」、②「査読回数制限の導入」、③「非会員の方が単独または筆頭で論文を投稿すること」の3点について、「強く賛成」から「強く反対」の4つの選択肢に「わからない」を加えた5つの選択肢から選び、その理由についても回答を求めました。それぞれの回答の分布を Figure 2 に示します。

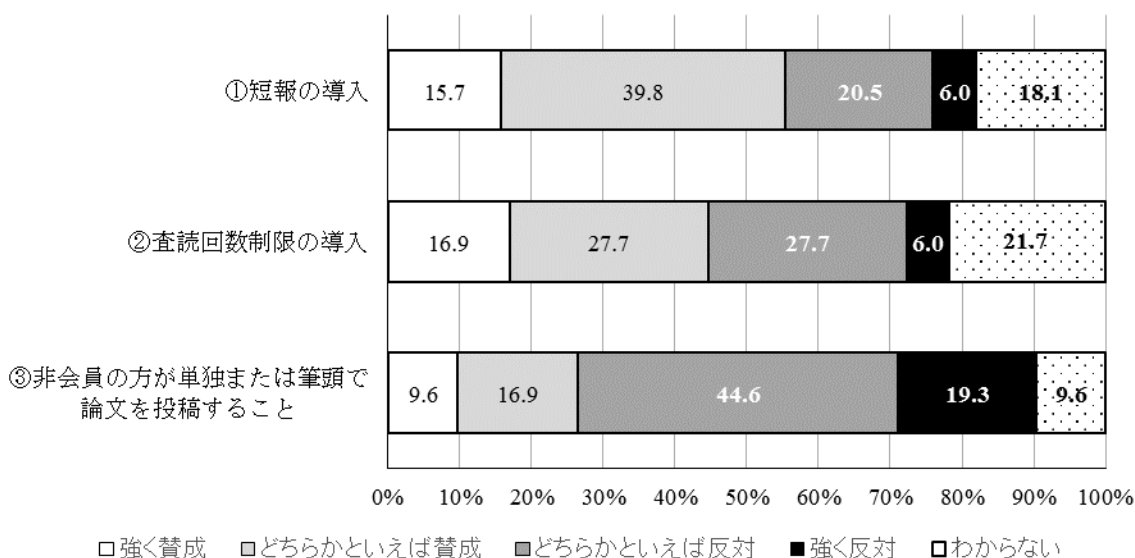


Figure 2 機関誌「青年心理学研究」に関する質問の回答分布

①「短報の導入」については、55%以上の方が「賛成」とした一方、20%弱の方が「わからない」と回答しました。「賛成」の方からは「パーソナリティ研究のショートレポートは、かなり入会の動機になっているようなので、学会の活性化のためにはいいアイデアではないかと思う」「青年を対象とした研究は多く、それらのデータを蓄積することとも重要な資料になると思われるため」という意見が出されました。一方、「反対」の方からは「年2号なので、早く載せることに意義があるショートレポートは不向きだと思います。また、現状の編集体制では短報まで広げると、編集事務局がパンクしそうに思います」「心理学に関する研究においては、実践報告以外で短報を発表する意味がないため(情報量の損失がその後の研究に致命的である可能性が高い)」などの意見が出されました。

②「査読回数制限の導入」については賛否が分かれ、「わからない」という回答も 20%以上みられました。「賛成」の方からは「無制限に査読があるのは、論文数を求められる若手研究者にとって負担かつリスクだから」「3 回ぐらいの査読で採択にならなような論文はリジェクトする方が投稿者・査読者の双方にメリットがあると思うから」という意見が出されました。「反対」の方からは「やりとりしながら、論文が仕上がっていくところもあるので」「制限をしてしまうと、途中で放棄してしまう場合があるのでは。至らない研究であっても、意義を推奨する意味あいでも丁寧な査読は役立つでしょう」という意見が出されました。

③「非会員の方が単独または筆頭で論文を投稿すること」については、60%以上の方が「反対」を示し、「賛成」は 25%程度となりました。「反対」する理由として「会費制

の学会であり、またオープンジャーナルでもないの、非会員を筆頭とする必然性がない」「会費を収めている会員が中心になる形で関わる論文である必要があると感じるからです。一方で、非会員による新たな視点の提供も必要かと思います。少なくとも論文の筆頭著者は会員であり、非会員と連携して取り組む形が望ましいかと感じられます」などがありました。一方、「賛成」の方からは「投稿の間口を広げ研究の質を高めるためにも、投稿料を徴収することで財政的にも大きな意味があると考えます」「非会員の中にも、青年心理学の発展に貢献するような研究をしている方もいると考えられるから」などの意見が出されました。

### (3) 日本青年心理学会について

日本青年心理学会については、①「学会による共同調査の企画・実施」、②「日本青年心理学会研究倫理委員会の設置」、③「中学生・高校生向けの公開シンポジウムの実施」、④「中学生・高校生の保護者や教員向けの公開シンポジウムの実施」の4点について、「ぜひ行うべきだ」から「行う必要はない」の3つの選択肢に「わからない」を加えた4つの選択肢から選び、その理由についても回答を求めました(質問によって回答の選択肢は適宜変更しています)。それぞれの回答の分布を Figure 3 に示します。

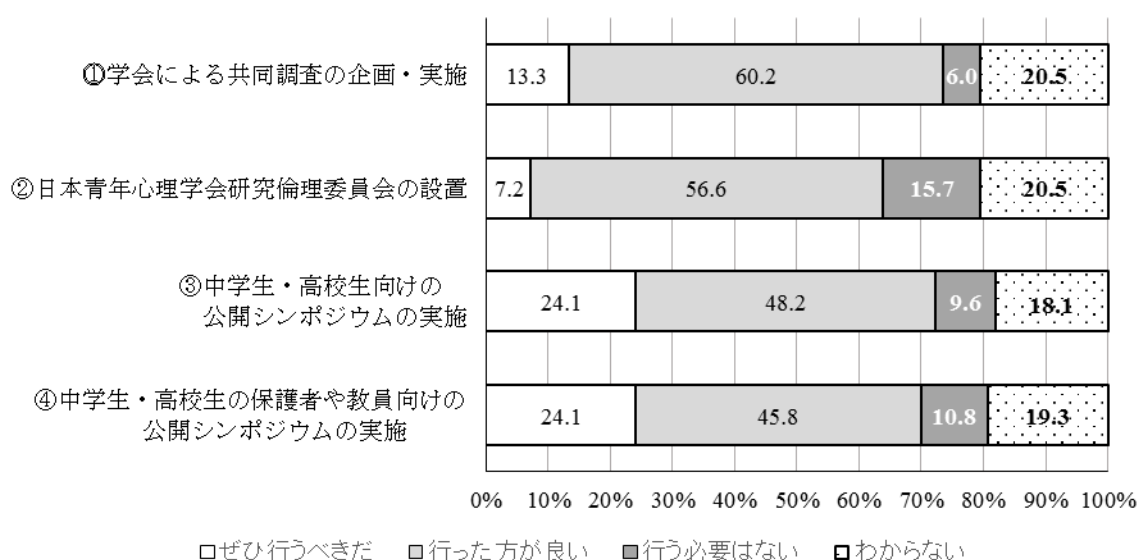


Figure 3 日本青年心理学会に関する質問の回答分布

①から④のいずれも、60%以上の方が「行うべきだ / 行った方がよい」とした一方、20%程度は「わからない」と回答していました。①「学会による共同調査の企画・実施」については、「標本数が大規模となる調査が実施可能となり、また大勢の人々が集まることで良い意見も集まる可能性がある。また、年度毎にテーマを設定し、テーマに沿った助成金を交付する等の枠組みを提供すれば面白いと思う」「あまり関心がありません。最大公約数的なテーマ設定になって、問題意識が拡散した平均的で味気ない成果になりがちな気がします」という意見が出されました。

②「日本青年心理学会研究倫理委員会の設置」については、「医学系や心理学系の学部・学科に勤務していない場合、研究倫理委員会が無い場合も多い為、学会に設置されていると助かる研究者は多いと思います」「運用時には申請者とのやり取りに大きな負担がかかり、他学会の倫理基準との調整が必要になる可能性もあります。青年心理学会としては、査読時に「倫理面での疑義があるか否か」を確認できる体制を整えることが肝要であると考えます」などの意見が出されました。

③「中学生・高校生向けの公開シンポジウムの実施」については、「自分たちの問題意識として青年心理学に関心を持っていただき、今後進む様々な分野に青年心理学の視点を活用してもらえれば、学术界全体への発展にも寄与すると思われるからです」「学会が積極的に行う仕事ではないような気がする」などの意見が出されました。

④「中学生・高校生の保護者や教員向けの公開シンポジウムの実施」については、「保護者にこそ啓蒙が必要だが、「すぐ役に立つ」を求められそうで研究の妨げになる可能

性もあるのでは。当の青年たちについても同じ懸念が残るが」「青年心理学・発達心理学的な観点から中学生・高校生をとらえるとどのように見えるのかを知る機会は重要だと思います。また、実際に青年とかかわる保護者や先生の考えを知る機会にもなると思います」などの意見が出されました

#### (4)その他、自由記述から

(1)年次大会について、(2)機関誌「青年心理学研究」について、(3)日本青年心理学会について、のそれぞれにおいて、要望などを自由記述してもらいました。また、アンケートの最後にも自由記述を求めています。ここでは、いくつか列挙して紹介させていただきます。

「大会の広報を早くする」「研究相談コーナーという院生が気軽に、自分の大学の先生ではない年長の学会員に相談できる企画」「NPOなどの民間の団体や地域コミュニティで活躍する人々とのコラボによるシンポジウムの開催」「意見論文はたいへん意義のある取り組みと思います。意見論文にもアブストラクトを付して掲載するなど、より公表できる形にしても良いかと感じながら拝読させていただいています」「ウェブ投稿ができたならより投稿しやすいと思う」「今回のように会員にアンケートを実施して会員のニーズを継続的に把握している学会もあり、有効であると存じます。学会として、文部科学省等の委託事業、委託研究に応募することも考えられます」「基本的に面白さがない。学会誌に読んでみたいと思う内容のものが少ない。研究手法をつつかれるあまり視点が乏しくなっているのではないだろうか」「『青年期』により近い30歳代前後の若手会員に発案や企画を任せる方向性をさらに強めてはいかがでしょう。活気が生まれると思います」。

---

---

## 大きくない学会なりのコストパフォーマンスと、実現可能性と

若松養亮（滋賀大学）

研究委員会のアンケート結果の概要を拝見して、当学会の諸役員の経験者としていくつかのことを述べます。

第1には、会員数が多くないことと、理事や委員を担う大学教員の多忙さの問題に起因することです。たとえば大会発表賞の設立や学会内の研究倫理委員会の設置です。前者は部屋が異なる口頭発表を同じ審査委員がすべて見て審査を行うこと、後者は、時間をとって申請内容を検討し、協議する場(物理的に集まらないまでも)を設けることは、現状では難しいと考えます。

第2に、当学会の独自性を今後とも打ち出していくことの重要性です。たとえば年次大会でのポスター発表の導入には多くの賛成意見がありました。しかしそれは大きな学会に複数回の機会があります。当学会の、「みんなで聴いてじっくり検討する良さ」はなかなか他学会で真似できないことです。院生にとってハードルが高い、発表者数を増やせるという声も理解はしますが、むしろそれを超えて、多くなくても質の高い発表を目指してもらいたいものです。

第3には機関誌のあり方です。非会員も無料で論文が読めるこの時代に、年会費を払う価値を改めて考えるべきでしょう。非会員からの投稿は、学会の裾野を広げる意味はあると思います。審査料や掲載料を制度化できれば、財政的にもプラスです。ただ短報カテゴリの創設は、筆者が査読にかかわっている「キャリア教育研究」の前例を見ると、うまくいきにくいと感じます。問題意識の背景や先行研究とのつながりの説明、あるいは方法の記述が制限字数内では不十分になりがちだからです。編集委員のマンパワーの少なさも気になります。第2の観点とからめると、意見論文やリプライは継続する意味はありますが、個人的に聞くかぎり、それらが負担になって投稿に二の足を踏むという声もありますので、今後検討が必要と思われます。

---

---

## 学会だからこそ提供できる機会を

丹羽智美（四天王寺大学）

私が院生だったある大会の時に「これだからここ（＝日本青年心理学会）はいつまで経ってもレベルが上がらないんだ」という呟きが聞こえてきました。ベテランの（年齢にみえた）先生の学会のあり方への批評は、当時の私にはとても刺激的でした。

今も昔も真面目な学会員ではない私は、本学会の将来に対するビジョンがあるわけはありません。しかし、本学会と同じように比較的規模が小さく、大会での研究発表はオーラルセッションが主であり、加えてポスターセッションも行っているヨーロッパ青年心理学会（EARA）に参加して興味深いと思ったことで、日本でもできたら面白いと思ったことを1つだけ述べてみることにします。

それはコーヒブレイクの時間と場が大会中に何度か設けられていることです。セッション後のコーヒブレイクで各々が集まって議論し深め、何らかの示唆を得、かつ新たな人とのつながりを作っていく様子を見て、学会でしかできないことを得ているように感じました。セッションが詰まっている日本の学会ではなかなかその余裕がありません。

今回の調査で項目にあがっている非会員の大会での研究発表、論文投稿の道を開くことは、学会を国際的に開くのであれば意味があると思います。世界中の研究者が対象になりますので今よりは学会が盛り上がるかもしれませんし、我々日本の研究者も国際比較しながら日本の青年像を追及できます。しかし、本学会のニーズはそこにはないと思いますので、非会員に対して門戸を開くことはあまり学会の発展に寄与しないのではないかと感じます。

それよりも、普段接点をもてないような学会員同士が年代問わずに容易に交流し、刺激し合い、時には共同研究を持ちかけることもしやすいような、学会でしかできない場や時間を学会が提供し、そこで得た縁やアイディアを使った研究が本学会での学会発表や論文投稿に返ってくるような循環ができれば素敵だと思います。

---

---

## 学会存続に向けた変化への期待

原田 新（岡山大学）

学会の運営に直接関わることの無い私にとって、学会は何となく存在し続けるものという漠然とした思いがあり、無くなる可能性を考えたことなど以前はありませんでした。しかし、少子化に伴う「大学の2018年問題」の年を迎え、大学の生き残りということ嫌でも意識させられる昨今において、いつどの学会が無くなってもおかしくないという危機感も徐々に芽生えつつあります。

歴史と伝統のある青年心理学会も他人ごとではなく、近年では会員数の減少の話題もたびたび聞かれます。そのような中、今回のアンケートには、学会の活性化やひいては学会の存続に向けて何か変化をもたらしたいという意気込みが強く感じられました。各質問によって、賛否両論や、中には反対多数の結果も見られますが、多くの質問項目に対して賛成の方が多い結果が得られています。これらの結果には、今後の青年心理学会の在り方として、現状維持ではなく、何かを変えて頂きたいという回答者の思いが反映されているように思いました。

もちろん、予算面や人的資源の不足、何らかのトラブルが生じるリスク等の問題もあり、賛成多数だからといって即実現というわけにはいかないと思います。しかしながら、「とりあえずアンケートを行ってみた」で終わってしまうのは、大変もったいないように思います。特に60%を超える賛成の得られた項目については、是非今後の学会運営における施策として実現可能かをご検討頂き、学会の活性化に向けて1つでも2つでも実施して頂けると大変良いように思いました。

---

---

## あとがき

研究委員会委員長 池田幸恭（和洋女子大学）

研究委員会で行った日本青年心理学会に関するアンケートの結果と 3 名の先生方によるご意見では、共通して「青年心理学会だからこそできる独自性」が求められていると感じました。2017 年 9 月に公認心理師法が施行され、各大学で資格に必要な科目をそろえるために、「青年心理学」の授業がなくなるのではないかと懸念を抱いたのは私だけではないように存じます。このような時代の節目に、数多くある学会の中から、「青年心理学会へ参加してよかった」、「会員でよかった」と生涯を伴にしてもらえる学会になるためには、継続すべき特長と変えるべき課題について真摯に検討していく以外にはないのではないかと考えています。

研究委員会では、大会時の企画シンポジウム、年度末のワークショップ、今回行ったアンケートのような独自企画と、大きく 3 つの活動があります。2 月のワークショップでは、懇親会も含めて、参加者が青年心理学についてじっくりと議論することのできる場となっています。このような世代も立場も超えた自由な交流からこそ、新しい息吹が生じてくると考えます。会員の皆さまに、ぜひ参加いただけるような企画を今後も検討していきたいと存じます。

最後にアンケートへ協力いただいた会員の皆さま、意見原稿を寄稿くださった先生方、本誌での企画実現にお力添えくださった皆さまに、改めて感謝申し上げます。今回の企画が、青年心理学をさらに活性化させていくきっかけになりましたら幸いです。

---

---

### <書評：私のおすすめ、この 1 冊>

**『トランジション—人生の転機を活かすために』**  
**ウィリアム・ブリッジズ（著）倉光修・小林哲郎（翻訳）**  
**パンローリング（2014 年刊）**

石黒香苗（東京大学大学院教育学研究科）

青年期には、就職、結婚、あるいは、実家暮らしから一人暮らしへ、といったことに至るまで、様々なトランジション（移行）の時がある。そのトランジションが待ち望んでいたものである人もいれば、不本意ながら突入する人、知らないうちに経験している人、等、その体験は実に様々である。どのようなトランジションにせよ、それ自体を経験しない人はおらず、その変化によって青年は青年期を一步步ずつ歩んでいく。

本書は、青年期に限らず、人生の様々なトランジションにおいて共通している事柄をまとめ、それにどう対応していくか、という点について示唆を与えてくれる。著者は、トランジションを 3 つの段階から説いている。それらは、「何かが終わるとき」、「混乱や苦悩のとき（ニュートラルゾーン）」、「新しい何かが始まるとき」である。この 3 段階を、青年期において多くの人が経験する「就職」という新たな段階に引き寄せて考えてみる。私たちは「就職」をすることによる新たな生活や人間関係の始まりに着目しがちであるが、そこには必ず「何かの終わり」と「ニュートラルゾーン」があることに気が付かされる。就職について考え始めるのとほぼ同時に、「学生である自分」というアイデンティティが崩れ始めるのを感じる人もいるだろう。あるいは、就職後に初めてその感覚を味わう人もいるかもしれない。いずれにしても多かれ少なかれ以前の自分の終わりを内的に経験することとなる。本書の興味深い点は、その後、新しい自分が始まる前の、何者とも定まらない時間である「ニュートラルゾーン」の訪れを示しているところである。

考えてみれば、私たちが一番恐れているのは、物事の終わりや始まりよりも、宙ぶら

りんな時期である「ニュートラルゾーン」なのかもしれない。だが、本書が示唆するように、振り返ってみると、確かに、苦悩が多いニュートラルゾーンで自分自身や将来について考えあぐねたことが、内的な再方向付けとなっていたのだと感じる。

青年期におけるトランジションは、頻繁に訪れて、思いのほか自分自身に大きな影響を与える。その中でも、特にニュートラルゾーンの訪れに焦らず向き合い、じっくり咀嚼することができるよう、多くのヒントをくれる一冊である。

---

---

### 『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ』

永田 カビ (著)

イースト・プレス (2016 年刊)

小平英志 (日本福祉大学)

きっかけは数年前の卒論生の研究テーマでした。自傷行為をネットで公表する動機や効果について、卒業研究で取り組んでみたいという話だったのですが、その関係で私も自傷行為の文献を探していたところ、本書と出会いました。著者自身の体験を題材にした漫画です。インパクトのあるタイトルやピンクを基調にした表紙デザインから、早々に研究費で購入するのを諦めたわけですが、届いた本書を見て、学生時代に松井豊先生の「恋ごろの科学」(やはりピンク色でした)を書店でドキドキしながら購入したことを思い出しました。今回はネットでカチカチやりながら簡単に購入できたわけで、時代の違いか、発達段階の違いか、そんな感情も起こりませんでした・・・

さて、話を戻して本書の内容ですが、著者である主人公(女性)は大学を退学した後、所属の喪失をきっかけに自己を見失います。居場所を求めたアルバイトも続かず、親の受容も十分に得られません。鬱や摂食障害、自傷行為や希死念慮に長く悩まされるのですが、「抱きしめられたい」という願望が明確になったことで、躊躇しながらもレズ風俗に飛び込み、特技であるマンガでそれを表現(レポ)することで自身の居場所を少しずつ作り始めていくことになります。このプロセスの中では、インターネットが非常に重要な情報源となっており、現代の若者らしい自己探求の様子を見ることができます。

本書を読んだ最初の印象は、とにかく上手に青年期の葛藤が表現されている、という点でした。自分自身の状態を知りたい、明確にしたいという思いのもとで、それを絵やことばでしっかりと表現されていることに驚かされます。漫画という表現法を著者が持っていたことは、自身の問題に迫る上でも非常に大きな意味を持っていたようです。次から次へと問いが降りかかってくる様子や、その中で「もがく」だけの自分のイメージ、中心的なテーマの周りをぐるぐると周りながら問いが変化し、まさに螺旋状に主人公の心の変化が起こることなど、読んでいて爽快ささえ感じました。最近のおすすめの一冊です。

---

---

#### <広報>

#### 日本青年心理学会 2018 年度国際ワークショップのご案内

日本青年心理学会国際交流委員会では、2018 年度国際ワークショップを開催することになりました。今回のワークショップでは、カリフォルニア大学バークレー校から Frank C. Worrell 教授をお招きして、時間的展望に関する研究と英語での論文投稿についてレクチャーしていただきます。Worrell 教授は、青年期発達を専門とする心理学者であり、研究テーマは時間的展望、アイデンティティ、学業行動、リスク行動など多岐に渡っています。また、学会誌論文の執筆だけでなく、数多くの学会誌で編集・査読を経験されています。

青年期発達に関する最新研究に触れて見識を広めたい方や、英語論文の投稿に興味がある方は奮ってご参加ください。

日 時：2018 年 7 月 29 日（日）14:00～18:00

会 場：筑波大学 東京キャンパス 116 講義室

（丸ノ内線 茗荷谷駅より 徒歩 5 分程度）

[http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo\\_access.html](http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_access.html)

参 加 費：会員 1,000 円，非会員 1,500 円

（参加費は当日，会場でお支払いいただきます）

申込方法：下記の連絡先に，「氏名」・「所属」・「懇親会参加の有無」

（18 時～別会場別料金です）を記入の上，お送りください。

件名は「国際ワークショップ申込」としてください。

詳 細：ポスターなど詳細は[学会ウェブサイト](#)にも掲載されています。

連 絡 先：[jsyakokusai2018@gmail.com](mailto:jsyakokusai2018@gmail.com)（日本青年心理学会 国際交流委員会）まで。

---

---

## 広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第 72 号より，会員の皆様から意見や要望を募るとともに，自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて，再度簡単に説明させていただきます。

●会員から募集するのは，以下の 5 つです。

①特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」

随時募集。過去の NL 記事を振り返りつつ，編集委員会で検討し決定します。

②書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」

随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。

③書評執筆の希望 「書評執筆希望」

掲載書籍への書評執筆の希望者を，原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。

④次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」

特集テーマへの投稿希望者は，原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。

⑤会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」

随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し，掲載の可否を決めます。不掲載の場合は，投稿者に理由を開示します。

●投稿・寄稿時には，必ず件名を「」内の通りとし，本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。

●書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが，編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか，最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み，改めて執筆を依頼します。

●すべての投稿先は，[jsyap-nec@googlegroups.com](mailto:jsyap-nec@googlegroups.com)（日本青年心理学会 広報・ニューズレター編集委員会）です。

●原稿の字数は 800 字程度を原則とします。

●書評推薦図書として『レクチャー 青年心理学：学んでほしい・教えてほしい青年心理学の 15 のテーマ』高坂康雅・池田幸恭・三好昭子（編著）風間書房（2017 年刊）があげられています。書評を書いてみたい書籍がある方は③の「書評執筆希望」でご応募ください。

- 第76号の特集テーマは「青年と部活動・サークル活動」です。現在、日本の部活動のあり方に注目が集まっています。考えてみると青年によっては部活動・サークル活動に大変なエネルギーを注いでおり、だからこそ、そこから青年の学びや成長につながることも多いのではないかと思います。そこで第76号ではご自身が部員・サークルの一員だった頃を振り返っての体験談、または親として、部の顧問（部長）・指導者としての体験談、あるいは課外活動に関する研究の観点などから、青年と部活動・サークル活動について自由に論じていただければ幸いです。さまざまな視点からのご寄稿をお待ちしております。④の「特集テーマ投稿希望」でご応募ください。

## 事務局からのお知らせ

### I. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室

TEL : 075-753-3047

E-mail : [seinenshinri@gmail.com](mailto:seinenshinri@gmail.com)

Website : <http://www.soc.nii.ac.jp/jsyap/>

振替口座 : 00940-6-273417

口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。